卒業生による桜の植樹。「この行事で茶臼山を身近に感じてもらえれば」と本廣さん

それぞれの児童が自作した名札が苗木につけられている

己斐茶臼山を再び憩いの場所に
茶臼山（ちゃうすやま）を愛し復元する会

西広島駅の西側に広がる己斐の住宅街。その高台に立つ己斐東小学校の裏手に茶臼山（ちゃうすやま）と呼ばれる小さな山があります。特に目立つ山ではありませんが、戦国時代には太田川の河口を抑える要所として平原城（己斐城）が築かれた歴史ある山です。以前は多くの桜が植えられていて、春には花見でにぎわったり、山頂でのお祭りには神楽が出たりと、地元の人たちの憩いの場所でもありました。しかし時が経ち、桜の木も寿命で枯れ、宅地化が進むに従って注目されなくなっていきました。

「茶臼山を愛し復元する会」の会長本廣（もとひろ）勇夫さん、そして総合プロデューサーの西山直樹さんは、「桜でいっぱいだった思い出の茶臼山を、なんとか復活させたい」と、地元の町内会などに呼びかけ、平成16年（2004年）8月に会員約60人で「茶臼山を愛し復元する会」を結成、茶臼山を整備することになったのです。

作業はまず、雑草や雑木で荒れていた山道や山頂周辺を整備し、桜の成木を植え始めることから始まりました。重い桜の成木を頂上まで運び上げるのは大変な作業でしたが、茶臼山を復活させたいとの思いが「復元する会」の皆さんを動かしました。また雨の降らない時期にはペットボトルに水を入れて山に上がり、水をやるなどの細かいケアも欠かしませんでした。そのかいあってか、翌年の春には桜の成木に花がつき、ささやかながらお花見も行うことができました。現在も桜の管理や山の清掃を継続しています。

また「茶臼山は自分たちの子ども時代の思い出の場所。今の子どもたちの思い出にも残るようにしたい」という本廣さんや西山さんの提案により、己斐東小学校の卒業記念として桜の苗木の植樹を行うことになりました。早速平成17年（2005年）3月、その年の卒業生により50本の苗木が植えられました。引き続き今年の卒業時にも実施し、毎年恒例の行事として定着させていく予定です。

茶臼山は住宅街の真ん中にありながら、さまざまな野鳥やタヌキ、イノシシなど多くの生き物が生息する小規模ながらも「里山」の要素を持つ貴重な山であり、己斐東小学校の児童たちの自然学習の場にもなっています。その貴重な「茶臼山」が再び桜の名所となり、注目を集めるのはそんなに遠いことではなさそうです。

昨年、茶臼山の山頂で行われたお花見。いくつかの成木が花を咲かせました

左から本廣さん、西山さん、己斐東小学校教頭の奥田栄彦さん

希少な笹木三月子大根の種

伝統野菜を生かして地域起こし
近菜高長（きんさいたかちょう）朝市出荷組合

コロンとした丸い形が愛らしい、白くてつややかな大根。広島市安佐南区高取、長楽寺地域の伝統野菜、「笹木三月子大根（ささきさんがつこだいこん）」です。昭和50年代まで盛んに栽培され、地元では食卓にのぼることが多かったこの大根は、出荷の難しさと安価な青首ダイコンの勢いに押され、いつしか姿を消しました。

平成に入り「幻」と呼ばれるようになっていた大根を見事によみがえらせたのが、地域の農家で作った「近菜高長（きんさいたかちょう）朝市出荷組合」の皆さんです。平成12年（2000年）、「自分たちの朝市にしかない特産品を」、そんな思いからたどり着いたのが笹木三月子大根でした。すでに栽培されることのなくなっていた大根の種でしたが、約15年の歳月をかけ品種改良に挑んだ生みの親、故笹木憲治さんのお宅で大切に受け継がれていました。

同年秋、ご家族から譲り受けた種と貴重な資料を参考に、組合の挑戦が始まりました。翌年の3月に初めて収穫できたのは、わずかに60本。その後、平成15年（2003年）に広島市農林水産振興センターから、「こだわりの広島伝統野菜復活事業」に取り上げられ援助を受けたこともあり、現在では1000本以上の収穫が可能になりました。「この大根が特産物として育ち、地域の活性化や地産地消につながれば」と指導する同センターの名和田潔さん。難しいとされる種採りの技術も向上し、今後の量産に向け、組合では確かな手ごたえを感じています。

まんまるとした形が特徴的な笹木三月子大根。2月〜3月に収穫を迎えます

組合員は現在29人。組合長の坂本尚子さんは組合員からの信頼も厚く、厳しくも優しいお母さんのような存在です。「繊維がつまって水分の少ない笹木三月子大根は、生で、煮て、揚げて、干して、葉はパンにと、捨てるところなしの“すぐれ物”ですよ」と坂本さん。「カラッと揚げた天ぷらはとても甘く、シャリシャリとした食感がとても美味しい」と、始終笑顔の組合員、加藤百合子さんと中村順子さん。収穫を心待ちにしているお客さんとのふれあいは、メンバーの張り合いにつながっています。かつては「幻」と呼ばれた、笹木三月子大根。直径約3ミリの小さな種が根付かせたのは、特産品としての町の誇りと同じ夢でつながった人々の絆でした。

左から市農林水産振興センター職員の冨田浩平さん、組合の坂本さん・中村さん・加藤さん、同センター職員の名和田さん

朝市はアストラム高取駅南の以前JAがあった場所で毎週土曜日8時半〜11時に開かれます

大根を使った加工品も組合で作っています

ひろしま

ぐるっと八区

広島には魅力あふれる地域や元気いっぱいの人たちが数多く存在します。
このコーナーでは、そんな"広島のステキ"を皆さんにお届けしていきます！

今年2月12日に行われた「南の風EBAあそび」の様子

中区

地域が一丸となって
イベントを盛り上げる

南の風の街 EBAを創る会

江波の特色を生かして地域を活性化させ、多くの人に江波の歴史を知らせたい。「南の風の街EBAを創る会」では毎年2月、町内総出の祭り「南の風EBAあそび」を開催しています。

江波に活気とにぎわいを

江波は、海とのつながりを色濃く残す町です。平成3年（1991年）、地域の活性化をめざして「南の風の街EBAを創る会」が発足しました。会のメイン行事は、毎年2月の第2日曜日に江波山公園で開催される、「南の風EBAあそび」。毎年2万人を超える人でにぎわいます。

この会のメンバーは、60人以上。町内会・子ども会・PTA・金融機関などで構成されており、各団体が分担を決めてイベントを盛り上げます。

祭りの運営資金を補うため、商店の名前を入れた「のぼり」を1件2000～3000円で募ります。ちなみにこの「のぼり」、事務局の方が手づくりしています。地域住民が少しずつ知恵と力とお金を出し合って、イベントを盛り上げるために協力しています。

のぼりの前で説明される大浦史郎事務局長

南の風EBAあそび実行会議

昨年12月14日の夜、江波町集会所で行われた打ち合わせ会議には、当日スタッフとして活動する運営組織の代表者である約30人が集まりました。企画・実施・運営管理・事故防止まで、すべて地域住民の手で行われます。この日は新企画である「ジャンボ江波巻きを作ろう」の説明や、各団体の分担確認、備品の確認などが行われました。

実行会議では、お互いにいろいろな
事柄を確認しあいます

中区を代表する祭りに

祭りの当日は、約600人のスタッフが活躍します。最近になって江波に移り住んだ人に地域のことを知ってもらうため、メイン会場では伝統芸能や伝統行事などが披露され、新旧住民の交流が図られています。実行委員のメンバーの出身地であったことが縁で交流が始まった島根県奥出雲町（旧横田町）からも、神楽団などの参加があります。

江波の郷土料理「江波巻き」や、無料で振る舞われる江波名産のカキを使った鍋も人気があります。

これからの活動

今年で14回を迎えたこの祭りは、すっかり「江波の冬の風物詩」として定着しました。現在この祭りを企画する事務局のメンバーの顔ぶれが固定され、平均年齢も上がってきています。今後は会の活動をより発展させていくために若い世代を巻き込み、新しい風を呼び込みたいそうです。

本番前日に行う「川上り」

江波と海とのかかわりを
現在に伝える

江波漕伝馬保存会

江波という地域は、宮島の管絃祭とも深いかかわりがあります。「南の風EBAあそび」にも参加した江波漕伝馬保存会は、300年以上の伝統を現在に守り伝えています。

地域住民で、伝統文化を継承する

江波の漕伝馬は管絃祭の時、御座船をえい航する役目を担っています。木造の伝馬船は代々「明神丸」という名が付けられ、江波港にある伝馬小屋格納庫に保管されています。

漕ぎ手になれるのは、20～30代の男性だけ。以前は江波地区在住でなければ資格がありませんでしたが、現在では範囲を広げ「広島市内在住で、練習に休まず参加できる人」であれば、参加可能にしています。仕事がある人がほとんどのため、練習するのは夜間。

本番2週間前から、日曜日以外の毎日行われます。呼吸を合わせて櫂を漕ぐのはなかなか難しく、かなりの体力が必要だそうです。

伝統を守り伝える

管絃祭の前日には、市内の本川と元安川を上って住吉神社で祈祷を受け、安全祈願する「川上り」を行います。当日は音頭や太鼓・采振りが調子を取りながら、左舷・右舷各7丁の櫂でタイミングを合わせて漕ぎ進めます。

御座船は、午後4時過ぎに3隻の伝馬船に引かれて対岸の地御前神社をめざし、約4kmの海上を往復します。大潮の時間になると厳島神社の回廊に入ります。神社の回廊内で3回転するのが、伝馬船の最大の見せ場。江波の男たちが海に戻った瞬間です。

若い世代に伝える

漕伝馬保存会代表の若松重美さんは、「後継者が育たないことが悩みの種」と語ります。江波地区も近年漁業が不振となり、漁業従事者のなり手が少なく若者も年々減少していますが、指導者の育成にも力を入れていますが、漕ぎ手を集めるのも困難な状況だそうです。

江波の漕伝馬の伝統・歴史をいかにして守り伝えていくかが今後の重要な課題だと考え、若松さんは、今日も指導に励んでいます。

「南の風EBAあそび」で焼きがきのブース
を担当する、漕伝馬保存会のメンバー

ちょこっとコラム

管絃祭

管絃祭とはどういうもの？

毎年旧暦の6月17日に行われる、厳島神社の伝統行事。平安時代、都では池や河川に船を浮かべ、その上で管絃の宴を催す「管絃の遊び」が盛んでした。厳島神社を造営した平清盛がこの風習をまね、厳島神社の神様をお慰めする神事として執り行ったのが管絃祭の始まりです。

どうして旧暦の6月17日なの？

この日が、大潮の日に当たるからです。1年の中で最も潮位が高くなる大潮の日でないと、厳島神社の回廊に船が接岸できません。一番潮位が高くなるのは旧暦の7・8月ですが、台風のシーズンにあたるため、6月の大潮を選んで祭事が行われます。

江波の伝馬船がえい航するのはなぜ？

元禄14年（1702年）、厳島神社参拝の帰路に暴風雨にあい遭難しかけた御座船を、江波・阿賀（呉市）両地区の漁船が助けたことがきっかけです。以来300年間、両地区の伝馬船が御座船えい航の任を担っています。

気軽に寄れる学びの宝庫

よりみちデポ

ケーキ作りに挑戦！　上手にできるかな

青少年が活発に活動 安東(やすひがし)公民館（安佐南区）

安東公民館は平成2年（1990年）5月1日に開館しました。「地域教育力の向上」、「まちづくり」、「生涯学習」の三つの支援を中心に、地道な事業を展開しています。

青少年ボランティアサークル「ボラビト」―ジングルボラ2005―

今から5年前の平成13年（2001年）に、「公民館で青少年ボランティアを育てよう」という目的で講座が開催されました。子ども会活動を経験したことのある中・高・大学生が集まり、老人ホームを訪問したり、キャンプを体験したりなどの講座が実施されました。その講座の参加者が集まって、「ボラビト」が設立されました。現在10人ほどの仲間が定期的に集まり、公民館側からサポートを受けながら、いろいろな企画を実施しています。

「子ども会で活動していたのですが、もっと上のレベルでボランティア活動をしてみたかったので、ボラビトに入りました」。リーダー格の谷野大樹さん（広島工業大学2年生）と、古川淑恵さん（文教女子大学4年生）は声をそろえます。

昨年12月11日午後1時から、メンバーが企画した「ジングルボラ2005」が行われ、近隣の小学校から2～4年生の児童24人が参加しました。4つのグループ分けの後で、趣向をこらしたゲームを実施。最初は指示が伝わりにくかったのですが、メンバーの粘り強い行動で、子どもたちの心も次第にまとまり始めました。

まずはゲームをして、仲良くなります

ゲームの後は待望のケーキづくり。ワイワイガヤガヤと大変なにぎやかさでしたが、自分たちで失敗を重ねながら取り組んだせいでしょうか、最後はケーキ以上の笑顔が出来上がりました。

誕生から5年たった現在ですが、まだまだ試行錯誤の状態は続いています。長い間参加しているメンバーが多いため、「新規メンバーが参加しにくい雰囲気になっているのではないか」、「忙しい中、いつ集まっていつ打ち合わせをするのか」継続しているゆえの悩みも尽きないようです。少子高齢化という課題を抱えた現代の日本ですが、二つの世代をつなぐ若者たちのボランティア活動には、大きな意義があることでしょう。

「安東公民館は、比較的青少年の出入りが多いのが特徴です」と話す、毛利誠館長の笑顔が印象的でした。

ジングルボラの案内板。メンバーの手づくりです

はるか中東の国 オマーンとの交流

平成6年（1994年）、アジア競技大会広島大会が開催されました。これに伴い、広島市内各公民館は「一館一国地域の応援事業」を展開。安東公民館は、オマーン国を応援することになりました。これが契機となり平成8年（1996年）1月11日、「広島オマーン友好協会」が設立されました。当時日本には財界を中心とした「日本オマーン協会」がありました。しかしオマーンにある「オマーン日本友好協会」の依頼に応える形で、新たにこの「広島オマーン友好協会」を立ち上げたそうです。それ以来、現在まで交流は続いています。地域住民による草の根の国際交流という点で、内外から大きな評価を得ています。

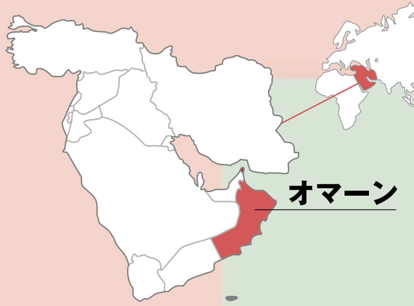
友好協会事務局長の竹中奉之(たけなかともゆき)さんは、「数回にわたるオマーン国への親善訪問、児童・生徒のホームステイなどを通して、相互理解は深まっていると思います。しかしもっと多くの地域住民に、オマーンのことを知ってほしいです」と語ります。現在年に1回、国際理解を目的として、安東公民館で「アジア（オマーン）理解講座」が開催されています。

八区覧会イベントとしてウオーキングを行った時には、休憩所でオマーンコーヒーとデーツ（ナツメヤシ）、ハロワ（オマーンのお菓子）で参加者をもてなしました。公民館がつくった交流のきっかけは、地域に受け継がれ継続されています。

オマーン国について

平成16年（2004年）に現国王下で建国30周年を迎えましたが、17～19世紀には海洋王国として栄えた歴史ある国です。人口は約234万人で、15歳以下が6割を超えています。面積は日本の約4分の3で、石油関連業や農業・漁業が主要産業です。

日本は石油を中東からの輸入に頼っています。石油タンカーはホルムズ海峡を通って石油を輸送しますが、このホルムズ海峡は非常に浅いため、オマーン側の海域しか通ることができません。オマーンが「日本のタンカーを通さない」と言えば、日本船はペルシア湾から出られなくなり、石油を輸送することができなくなります。オマーンは日本にとって、非常に大事な国なのです。



広島オマーン友好協会の竹中奉之事務局長

Information
安東公民館
広島市安佐南区安東2-16-42
TEL&FAX:082-878-7683
yasuhigashi-k@hitomachi.city.hiroshima.jp
http://www.hitomachi.city.hiroshima.jp/yasuhigashi-k/

ひろしまの会社の
おもしろPレポート
P REPORT

Pレポートの“P”は、Philanthropy（フィランソロピー・企業などが地域活動に参加すること）、Peace（ピース・広島のアイデンティティーとしての平和）、Public（パブリック・公共に開かれている）などの“P”をイメージしています。

私たちの知らないところで、社会貢献活動を行っている広島の企業はたくさんあります。このコーナーでは、そんな企業の取り組みをご紹介します。さて、今回はどんな企業が登場するのでしょう？

すべては一人の思いから始まる
株式会社マルコシ

人生の師との出会いから始まったトイレ掃除

住宅リフォームや経営コンサルタントなどを手がけている株式会社マルコシは、創業から41年の企業です。約半世紀、着実に歩んできたマルコシが、創業者である木原伸雄さん（現・取締役相談役）を中心とした地域活動を行っていることは、地元安佐北区ではよく知られています。小学校や中学校でのトイレ掃除指導や会社周辺の清掃活動、農業体験塾など、幅広い活動で地域に貢献しています。そもそも、マルコシがこうした活動を行うようになったのは、木原伸雄相談役が”人生の師“と仰ぐ鍵山秀三郎氏（イエローハット創業者）と出会ったことがきっかけでした。

地域の清掃活動やあいさつ運動は14年間日課として続けていた木原相談役でしたが、10年前、東京都内で開かれた経営セミナーの講演で、鍵山氏が30年前、人が嫌がるトイレ掃除を始められた動機などを拝聴し、今までにない衝撃を受けたそうです。30年間、1日も休まず会社のトイレを素手・素足で磨き続けられたこと、しかもそれが大企業の社長（当時）だということ、合わせて鍵山氏の穏和な人柄に触れ、木原相談役は次第に鍵山氏を”人生の師“と仰ぐようになり、同時に各地での「トイレ磨き活動」に参加し始めたそうです。

素手、素足でのトイレ掃除

こうして始まったトイレ掃除活動。今では社員も地元の小学校や中学校に出向いて、生徒たちと一緒にトイレ掃除を行っています。6年前には「卒業記念として、後輩にきれいなトイレを残したい」という落合小学校の児童の声に応え、一緒に汗を流したことも。そこでも全員が素手・素足になって便器を掃除します。「人の嫌がることを進んでする」という大切さを、このトイレ掃除を通して生徒たちは実感・体得しているようです。

一見ささやかな活動ですが、「小さなことでも、気付いた者が始め、長く続けていくことが何より大切」と木原相談役。掃除道具の使い方や片付け方についても効果的・効率的な方法があるそうで、ホースを例にとっても、ただ巻いていくのではなく、手に持つ所に印をしておけば均等にしかも簡単に巻くことができるなど、聞けば「そうか」と思うことばかり。まさに”目から鱗“。

「自分さえよければ」という風潮が強い現代、木原相談役をはじめマルコシが取り組む地域活動は「小さな」ことかもしれませんが、人が本来持っている”思いやりの心“を取り戻すための大きな第1歩につながっているはずです。

今年も卒業記念のトイレ掃除に、社員は日浦中学校へ出向きます。この心温まる交流が毎年続いています

Information
株式会社マルコシ
所在地　広島市安佐北区落合4-1-7
☎843-9981（代）
代表者　木原　愛一郎　氏（代表取締役）
従業員数　14人
事業内容　住宅リフォーム
設　立　昭和46年（1971年）10月
創　業　昭和40年（1965年）2月

次世代を担う子どもたちの、素直な心と豊かな感受性を育てたいと願う思いが、木原相談役やマルコシ社員の活動の原動力になっています

ふる里と教育に対する思いが生涯をかけたライフワークに「志路・竹の子学園」

安佐北区白木町志路出身の木原相談役。そのふる里で地元の農業の先輩たちの協力のもと、平成14年（2002年）4月に親子農業体験塾「志路・竹の子学園」を開塾しました。現代の子どもたちを取り巻く環境に憤りを感じていた木原相談役でしたが、「批判だけでは無責任すぎ、一市民としての責任を免れない」と、65歳になった4年前、一念発起して先祖伝来の大切な田畑や山林を子どもたちの教育のために役立てることにしました。ただ次世代を担う子どもたちの将来を思う一念で。

そしてその夢の構想を頼もしく受けとめたのが、ふる里の先輩たちでした。「子どもたちに農業の実体験を通して、人としての大切な価値観や命の大切さなどを実感してもらいたい」という木原相談役の熱い思いを全面的に支持し、協力を約束してくれたのでした。

こうして動き出した”農業体験塾プロジェクト“は、少しずつ現実のものとなっていきました。木原相談役の私有地である約1300坪の田畑などに加え、3700坪の竹林が地元の方から無償で提供されました。地元の農業や農園のプロたちで結成された「志屋つくしクラブ」によって、荒れ放題だった土地を農作物の実る田畑に再生し、山林や竹林をきれいに整備し、子どもたちを迎える準備は着実に整いました。

見事に生まれ変わった大自然に、主役の子どもたちを呼ぼうという段階になった時、予想外の事態が起こりました。募集をかけても塾生が集まらないのです。定員15組のうち1組も。開塾日は近づく一方、受け入れ態勢も万全。”このままでは今まで協力してくださった先輩たちにも申し訳が立たない“という焦燥の念に駆られるばかり。そんな木原相談役に追い打ちをかけるように、「胃がん」という病が体を襲いました。仕方なく開塾を1年延期し、その間に体調、塾生募集、整地とを万全にし、いよいよ待望の開塾となったのです。

地元の方と、生まれて初めてのわらじづくり

最初の募集では1組も集まらなかった親子農業体験塾「竹の子学園」に、親子、祖父母含め総勢72人が集まりました。月1回のカリキュラムが組まれている竹の子学園の決まり事としては、①農業指導など労力は無償で提供すること②行政の支援は一切受けないこと③肥料や種・苗などを購入するための費用は塾生が負担すること（年間2万円）です。加えて、必ず親子で参加すること。子どもには「礼儀を重んじること、時間を守ること、後片付けをすること」、親には「子どもを叱らない、子どもの手助けをしない」という決まりがあります。まさに人生初となる米や野菜作りや東屋（あずまや）での親子の昼食、虫採り、泥遊び、わらじづくり、そうめん流しなどを体験し、子どもだけでなく親もたくましくなります。

4月の入塾式に始まり、11月の卒塾式で1年のカリキュラムを終了する農業体験塾。6年生には心のこもった手づくりの卒塾式を行い、最後に一人ひとり頬ずりをしてお別れをするそうです。1年の交流で親戚同然となった地元の方たちとのお別れだけに、万感もひとしおです。

「人生これから！」と、この活動にやり甲斐を感じ、全身全霊で子どもたちと接する地元の高齢者がこの塾の屋台骨となっています。そして今や木原相談役の生涯のライフワークになり始めている竹の子学園。さらに土地を広げ、自然を生かした教育の環境づくりは、新しい展開を始めています。